

---

# とある高校生の週末

soku

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある高校生の週末

### 【Zマーク】

Z9998Q

### 【作者名】

soku

### 【あらすじ】

特に変わったところはないけれど、特別である。

とある高校生が、終末に向かう世界で、ちょっと変わった人たちと週末を迎えるお話。

## 1-2月第2週(1)(前書き)

前作「とある高校生のお話」の続編です。

多分読んでないと話がわからないとと思うので、注意を。  
この作品はフィクションです。作中の事件や名前は実在のものとは  
関係ありません。

## 12月第2週（1）

週末は特別だ。何気なく生きていると見過してしまうがちだが、私たちは週末があるからこそ平日頑張れるというもの。一生懸命なんて言葉があるが、本当に一生、懸命になるなんて無理。どこかで頑張り、どこかで休む。人生の、本当に小さな節目。それが週末。これはそんな週末に起こる、ちょっとした事件のお話。

12月 第2週（1）

週末がやつてきた。

朝晩の冷え込みも厳しくなり、気づけば吐く息が白くなっていた。暖房を入れていない部屋は驚くほど寒く、私は布団から這いだせい。

もうこんな時期なんだなあ……。あと一ヶ月で今年も終わりか。

布団からできるだけ体を出さないようにして枕元の時計へと手を伸ばす。午前10時。学校には完璧に遅刻だけれど、今日は土曜日だ。誰が最初に暦を作ったのかは知らないが、週末を作ってくれたことには感謝せねばなるまい。いや、週末を休みにした学校に感謝すべきなのか。まあどうでもいいや。

「うわ、6しかないじゃん……私の部屋だけ欠陥住宅なのかな。」

部屋なのに欠陥住宅という表現はおかしいけれど、そんなことはどうでもいい。

時計に内蔵されている温度計の表示に愕然としながら、私は伸ばしていた手を布団の中に戻した。ああ寒いなあ……寝てたいなあ……。『ごりり、と私は寝がえりを打つ。

「……うわう？！」

思わず奇声を上げてしまつたけれど、まず私の話を聞いてほしい。

冬、気温が6℃、布団でぬくぬくとしていたところで布団をいきなり引きはがされたら、そうなるでしょう？悲鳴ぐらい上げるでしょう？上げないとおかしい。異論は認めない。

まあ別に誰かが私の布団を引きはがしに来たわけではないのだけれど、結果それと同じ状況になった。布団がずれていたようで、布団は私の寝がえりで私の上から完璧に外れてしまつたのである。全く誰が私にこんなふうに布団をかけたんだか…。

べ、別に私の寝姿を見せてるわけじゃないんだからね！

さ、朝のツンデレサービスも完了である。私、絶好調。

あ、申し遅れました、神崎優希です。

釣り目、スタイル良し、顔良し、成績良し、素行良し、天然。

完璧じやん。需要ありまくりじやん。さすが私。

まあ天然に関しては彼氏の前でしか披露してないけれど。

まあ私の痛い自己紹介はこれくらいにして…あ、自分で痛いって言つちやつた。まあいいや。

布団を失つた私は敷布団の上で猫のように丸くなつていたわけだが、寒さに慣れてくると別に大したこともなくなつた。時計を見ると10時30分。あ、私一度寝してるじやん。風邪ひくわ。

私はほとんど寝ぼけたまま、充電スタンドに立てている携帯電話へと手を伸ばした。ぼんやりと目を開けた時、真っ先に携帯のイルミネーションが目を突き刺してきたからだ。もともと北向きの窓である上に遮光カーテンで窓を塞がれているこの部屋では、着信を表すその光は意外なほど眩しい。

「はあ…ああ…参つたな。」

10時からきつかり5分置き。

不在着信6件。受信メール6件。

差出人、浅井啓司。

私の彼氏からである。

きつかり一定の間をとつて連絡してくるあたり、浅井君らしくて素敵……じゃなくて。

私は慌てて電話をかけ直そうとする。しかし私が発信ボタンを押すより早く、携帯の画面には電話着信の画面が表示された。10時35分。相手は言つまでもない。

「もひもし……」

「噛んだ。

「ああ神崎？ 噛み具合が凄く可愛くて素敵なんだけど、約束の時間過ぎてるつてのはそれじゃ誤魔化せないぜ。」

恐い。凄く恐い。

私の彼氏、つまるところの浅井君は非常に時間に厳しい。いつもなら頼もしいスケジュール帳になつてくれる彼（彼氏をなんという扱い）なのだが、何か約束している時の彼は時限爆弾だ。早く行つて解除しなければ、彼は爆発してしまつ。しかも、地味に爆発する。いつそ大爆発してくれた方が助かる。もちろん彼も堅物ではないので「遅刻してもいいから連絡して」と言つてくれているのだけれど、残念なことに私が遅刻する時は大抵寝坊なのである。連絡できるわけがない……。

「3分間待つて下さい……」

「3分？本当に3分でいいのか？」

「すいません15分待つて下さいお願いします。」

迫力に押されて、下手に出てしまう私。何やつてんだか。

「のやりとりだけ見ると私がまるでロボでも受けているかのようだけれど、実際は全然そんなことはなくて、日頃の浅井君はドMもドM、私からあれやこれやと虐げられる毎日を心から楽しんでいる。私にとつても、彼が一生懸命私を弄ろうとしてくるのを叩きのめして自分のいいように持つていくのが堪らなく愉快なのである。

そんな彼が時間にだけは厳しいのだから不思議だ。私の送り迎え（私の通学は彼のバイクに頼つていい）も時間通りきっちり行われていたし、もともと時間にシビアなタイプだったから、当然と言えば当然なのかもしれない。実は彼の心臓は時計なのかも。もしそうだとすれば彼の心音は秒針の動く音か…うーん、それはちょっと嫌だな。

そんなことを考えながら私は服を着替え、顔を洗い、歯を磨いて、靴を履き、家の戸締りをして、玄関の鍵を閉め、家の門をくぐり、浅井君の前に立つた。さあ何分何秒？！

「14分42秒。なかなか頑張つたな。」

そう言つてにやりと笑う浅井君。ヤバい、かっこいい。

「けど、遅刻はダメだから。ちゃんと謝るんだ。」

表情をキリッと変えて、はつきり言う浅井君。

彼、自分では気づいていないようだけれど、かなりリイケメンの部類に入る。髪はボサボサだし、目つきが鋭くてぱっと見ちょっと怖い印象はあるけれど、どこか頼れる雰囲気がある。例えるなら「スノートのしみみたいな。顔がそのまま似ているわけじゃなくて、何となく雰囲気が。」

「…」「めんなさい。」

まあそんな顔で言われたら、謝りますよ。私は決して面食いではないけれど、もう歯向かう術なし。まな板の上の鯉みたいな。恋みたいな。

「あまり上手いことは言えてないけれど、それでよし。じゃあ行こう。」

浅井君は再び笑顔に戻つて私を促す。

モノローグにもツツ「ミニを入れてくるあたり、さすが浅井君である。

実は今日、10時に浅井君が迎えに来て、一緒に買い物に行く予定になつていた。そろそろクリスマスだから、プレゼントを見よう

と私が誘つたのだ。お互に欲しいものを何個か選んでおいて、後日その中から何かをプレゼントするという流れだ。サプライズ的な楽しみは減つてしまふけれど、外れはなくなるので、二人ともそれで納得した。保守的な2人なんです。

と、見せかけておいて、私は彼の誕生日プレゼントを選ぶのが真の目的なのです。策士ですなあ私。12月26日が誕生日である彼は、いつも誕生日とクリスマスを一緒にされていたらしいけれど、私がいる限りそれはない。だつて私も誕生日とひな祭りを一緒にされて不満だつたんだもの。気持ちわかつちゃうんだもん。

にもかかわらず私は寝坊してしまうわけです。今までの話だと彼が時間にとにかく細かくてうるさい人のように見えるかもしけないけれど、今回は私が悪い。というか、そもそも10時に起きた時点で一度寝してなくとも10時の待ち合わせには間に合わないわけで……目覚ましの時間、間違えちゃつてた？

なんだか重大な事実に気づいてしまった気がするが、これは浅井君には黙つておこう。

地方都市ならでは、郊外の妙に立派なショッピングモールに私はやはつてきた。それと釣り合わない人の数は、何だか安心する。あ、もちろん少ないって意味。それでもこの町の中では十分賑わっているほうで、ほとんどの買い物はここで間に合う。

「どいつもこいつもリア充しやがつてああもう恥ましい！」

「僕の真似してそういうこと言つのやめて！マジで評判下がるからやめて！」

恒例の浅井君弄り。ああ可愛いなあもう。

時期が時期なので、周囲はカツプルだらけだ。まあ、仮に別の時期に来たところでカツプルだらけなのだけれど。カツプルは年中無休なのである。私たちもカツプルなのは言わないお約束。

そして今何をしているかと言えば、私は浅井君と一旦別れて一人で行動中だ。別に喧嘩したわけでも、浅井君よりも大切なものがあつたわけでもない（そもそもそんなものはない）。私は浅井君の誕生日プレゼントを買いに来ているのである。こればっかりは彼同伴というわけにはいかないので、死にそうなほど寂しさに堪えながら一人でいるというわけ。トイレに行くと言つて抜け出してきました。策士ですなあ私。

というわけで色々見ているのだけれど、どうもいまいちピンと来なくて困っている。最初は服とかにしようと思つたのだけれど、彼はおしゃれに極めて無頓着（レギンスを最近まで知らなかつたらし）だし、あまり喜んでもらえないだろうと考えて結局やめた。うん男の子が喜ぶものってわからないなあ… A Vあげれば喜ぶかな。

あ、浅井君いないからつっこむ人がいない。

とまあぐるぐると店を回つて、うちに私はアクセサリーショップの店員に呼びとめられて、腕時計を買って出てきていた。買った

のは妙に渋いデザイン。浅井君が腕時計をしているところは見たことがなかつた気がするから、ちょうど良いとばかりに勢いで買つてみた。とはいえ適当に選んだわけではなく、私なりに考えて選んだつもり。まあ結局、浅井君は何をあげても嬉しそうな顔をするのだけれど。

「うわあ…参ったな…」

気付けば彼と別れて40分が経つていた。もうトイレという言い訳は通用するまい。かと置いて今の行動を説明してしまつてはネタバレになる。時間に厳しい彼のこと、さすがに遅すぎると思つてているだろう。

いや、40分も待たされれば誰だつてそう思つうか。

そういえば、浅井君の話をしておこうと思つ。

浅井啓司。身長178cm。体重68kg。私の彼氏。

私が彼のことを出会つたのは、忘れもしない5月25日のこと。放課後の学校を徘徊していた時、彼の教室で彼と出会つた。

いきなり残念な話だけれど、浅井君は友達が多いほうではない。いや、ほんどいない。

恐らく一人もいないということはないと思うけれど、私は彼が同じクラスの田中君と宏美以外の人と話しているのを見たことがない。私は彼と違うクラスだから見る機会が少ないとこことを考慮しても、やはり友達は少ないだろうと思う。

でもそれは彼の性格が悪いとか、人を寄せ付けないほど不潔とかそういうわけではない。ただ、彼ははつきり言つて恐いのだ。みんなにとつての彼を一言で表すなら、「重厚謹厳」と言つたところか。

でも、それは彼の本性ではない。本当の彼は冗談も通じるし、素直だし、本当に信頼できる人だ。彼と少しでも話せば、彼の懐の深

さに驚かされるはず。相手の意見を聞き、自分の行動を反省し、相手にとつてより良い道を探す。誰もがそうしたいと願いながら、なかなかできず、にいることをさらつとやつてのける。それが彼だった。ただそれに本人は無自覚なようで、自分が信頼されているなんてこれっぽっちも思つていない。むしろ、自分を頼りなくて嫌なやつを見せようとしているようにさえ思える。黙つてればモテるのに、なんて人は結構いるけれど、彼は全く逆。喋つてればモテるに。

でも私は、彼の学校での立ち位置は結局誰かしらに気を使つているからではないか、と最近思つ。以前彼にやんわりと質問した時に、僕は他人の気持ちなんて知りたくないから、と彼は言つていた。誰かの不幸を防ぐためなら、僕は不幸でいい。そんな気取つたことを、真顔で言つた。

どうしてだらう。

彼の幸せを願つている人間もいるんだと、どうして気付いてくれないんだろう。

と彼についてつらつらと考察しながら歩いているうちに、彼との合流地点に戻つてきた。3階まで吹き抜けになつていて、ショッピングモールの中心部だ。ベンチや自動販売機があつて、待ち合わせには好都合な場所である。

「浅井君……？」

だが、そこに彼はいなかつた。

彼がいたのはそこから少し離れた場所。

私が浅井君を見つけたのは、中心部の周辺部（妙な表現だが気にしないで欲しい）だつた。柱に寄り掛かつて、何かをぼんやりと見ている。何となく声をかけられずに遠くから彼を観察していると、彼の目線の先に誰かがいることに気付いた。多分、その存在にはもつと早くから気付いていたのだと思うけれど、自然と意識から外していきたらしい。

君たちは終末に夢を見るか？

最近ニュースで見る、自称革命家の人がだつた。

世界は終わる。何も学ばなかつた愚かな指導者、何も考えない群衆、双方の責任で世界は無様に続いてきた。この世界は数多くの犠牲で成り立つていて。自分の知らないどこかの誰かの犠牲で成り立つていて。そして自分も、世界を成り立たせる犠牲の一つなのだ。だが今の世界は命を捧げる価値があるか。答えは否だ。遙か昔から受け継いできたもの、それを後世へと伝えるのは我々の義務だ。我々は先に進まねばならない。今、この世界に終末を迎えるよう。

大体こんな感じの内容だつたと思う。周りに聴衆の人だかりはできていないし、特に誰に向つて話しかけるわけでもない。ひとしきり街頭演説を終えたところで、革命家の人は何事もなかつたかのように人ごみに消えていった。そして何事もなかつたかのように、週末のショッピングモールの風景が戻つてくる。

なんというか、革命がどうとか言われてもいまいちピンとこないなあ。そもそもこういう演説に耳を傾けるのは初めてな気がする。一応政治関連のニュースなんかもチェックするようにしていったけれど

ど、いつの激しい話題は自然と相手にしていなかつたのかもしれない。

私がぼんやりと立ち廻へしていると、浅井君が歩き出した。どうやら合流地点に戻つて行くようだ。私は彼に見つからないように、近くの書店へと入り、雑誌を読むふりをする。あれ、私何で隠れるんだ？

彼は合流地点まで戻つてくると、自動販売機で缶コーヒー（プラック）を買ってベンチに座つた。ここまで缶コーヒーが様になる高校生もいないよなあ。

そんな彼にどうやつて話しかけたものか困つたけれど、まあなんだかんだ工夫するより、自然に話しかけるのが一番だらつ。ここは淑女神崎優希の本領發揮である。

「ファーストインパクト！」

「ぐあああ？！」

私は彼の腹部に思いつきり突きを入れる。完璧。常人なら立ち上がるのもできなくなるほどインパクトだ！

「ああ……あ、神崎……早かつたな……」

あれ？

私の突きを受けながら、低くうめき声をあげるだけに抑える彼。その根性には感服いたします。

「ごめん……今日あれの日だったの……」

「もうそれ以上言つなよ？！ 女の子にしか来ない例のあの日だとか言つなよ？！」

「自分で言つてんじやん。」

そんなことを適当に話しながら、彼と一緒に歩き出す。

会話の内容は気にしないで頂きたい。

「ねえ浅井君。明日や、世界が滅びるなら何する？」

私は深く考えずに彼に聞いた。つこさつき革命家の話を聞いたか

うだらうか、何となくそんな話題を選んでいたようだ。

「もし世界が滅びるなら。」

彼はこちらを向くこともなく、表情を変えることもなく言った。

「その原因は多分僕だね。」

その時の彼の顔は穏やかで、落ち着いていて、無機質だった。

私は思わず立ち止まる。

「え、ええ…？ えっと…」

彼の発言の意味が理解できず、言葉にならない言葉を返す私。

「ああごめんごめん、何でもないよ。」

私の困惑を察した彼は空気を変えるために明るく言った。

その表情はいつもなら私を安心させてくれるものであつたはずだけれど、今回は不安を煽るものでしかなかつた。

私は彼に隠し事ができない。

でも彼はできる。

当然なことであるけれど、改めてそつ思つと妙に寂しくなるのだった。

## 12月第3週（1）

今日も寒い。マジで寒い。

私はもぞもぞと布団から頭を出す。

布団からできるだけ手を出さなくて済むように、枕元へと移動させてある日覚まし時計。先週の反省を活かして、布団の位置も修正済み。完璧。

「ううん…」

私は目線だけを時計へと向けて表示を確認する。

現在時刻は9時。内蔵されている温度計を見ると4℃。寒つ。

先週同様10時きつかりに浅井君と約束をしているので、1時間余裕を持って起きられたわけだ。計画通り。

「ううん…？」

ただ私の計算と少し違うのは、携帯のイルミネーションが点滅していること。

10時になれば浅井君からのお叱りのメールがあると思つけれど、まだ9時だ。1時間前からメールを送つて来るほど彼はせつからではない。しかし青く光るイルミネーションは、間違いなく私が彼専用に設定したもので、私の携帯が私同様ドジっ子でもない限り彼以外の人間からのメールではないことは明らかだつた。

私は緩慢な動作で携帯の充電スタンドへと手を伸ばす。結局布団から思いつくり体を出すことになつてしまつた。

「ぬおう…！」

思わず気合いの入つた声を出してしまつたけれど、4℃の部屋で布団から体を出さなければいけない状況なら仕方ないと思いませんか。思いますよね。思え。

2つ折りの携帯をこじ開けるように指を入れて画面を開くと、新着メールが一件。

送信時刻：08：12

差出人：浅井啓司

タイトル：無題

本文：用事が入ったごめん。

無題というタイトルに、淡白な本文。やはり彼からのメールだった。

今まで彼が約束をドタキャンすることなんて滅多になかった。今まで偶然それがなかつただけで今回がその一回目、ということなんかもしれないけれど、午前8時につくる用事というものが想像できない。メールの本文はいつも淡白だけれど、ここまで短くて味気ないのは初めてだ。

本文：わかった。また今度よろしく。

私も短めにメールを送る。何か緊急な用事なのだろう。あまり長いメールを送つても迷惑かもしない。彼のメールが味気なかつたのは、きっと時間が差し迫つて急いで打つたからだ。きっとそうだ。そう自分に言い聞かせて、携帯を枕元に置いた。

「ああ…つまんない。」

私は布団の中でもぞもぞと丸くなつて呟く。急に予定を失つて、本当にやることがない。高校の課題は昨日の夜に終わらせたし、予習も復習も終わつたし、つちにゲームはないし、本は全部読んだし、ああもう。

私は遂に寝ていることに飽きて、布団から抜け出す。体が寒さのせいで震える。腕を胸の前で組み、背を丸めて膝立ちになつて暖房のリモコンを目指す。畳敷きの部屋の中央に敷いた布団。そこからリモコンを置いた机までが妙に遠い。まるで永遠に感じられる距離だ。

「ああ…」

私は力尽きてその場に倒れる。ああ私もここまで…短い人生だつたけれど、楽しかったよ…。

なんて展開になるわけがないので、というか、たかだか4畳半の部屋で力尽きてたまるか。私は怠惰な自分に鞭打つて、リモコンへと這つて行く。うん？自分に鞭打つて例えじゃなくて本当にやつてる人いそうだな…。

「はあ！」

机まで辿り着いた私は、気合の入った声を上げてリモコンへと手を伸ばす。この長く苦しい旅もこれで終わりだ。これで遂に…。ピッ。

短い電子音がして、頭上のエアコンから温風が吐きだされる。暖かいその風は、まるで私を褒め称えるかのよつで。やつた…私やつたよ…。

まあ暖房つけただけなのだけれど。距離にしてせいぜい1mなのだけれど。

少しずつ暖かくなる部屋に横たわって、私は再び携帯を手にとる。メールとか電話をするわけではなくて、みんながやつてている登録制のミニーティサイト×mixを見るためだ。私はみんなが日記を書いていたり掲示板に書き込んだりしたことをチェックするだけ。登録こそしているけれど、見る専門で自分から書き込むことは滅多にない。「南さんと北山さんは買い物、川上さんは勉強、沢下さんは部活、細田君はランニング、太田さんは映画観賞、風間さんと谷君は食事、米沢さんと英さんと蘭さんはカラオケ…」  
ぶつぶつと呴きながらみんなが書き込んでいる予定を見る。

こうやって改めて見てみるとこれつてある意味ストーカー…ひとつては嬉しい状況だよな…リアルタイムでどこにいるか報告してくれるわけだし。まあ書き込まなければいいだけだし、登録制でパスワードも必要だからそう簡単に見られるわけではないけれど。

「はあ…」

私はぼんやりと天井を見る。一いつ時天井の染みを見るのが定番らしいけれど、私の部屋の天井はいたつて綺麗。特に見るものがない。

「はあー…げほつ」

吐きだす溜息も尽きてしまった。

どうしようもないでの、再び携帯を手に取る。どうしようかと少し考えて、そのまま×mē×を開く。咳き（掲示板のようなもの）のスペースを選択して、携帯のボタンを押す。操作音を消している携帯、力チ力チと氣の抜けた音を立てる。

本文：暇で死にそうです。誰か助けてください。

なーんてね。

誰かが見て連絡くれたら嬉しいなあ、といつ淡い期待を込めて書き込んでみた。まあそう都合良く×mē×を見ているとも思えないし、私は連絡くれる人がそんなにいるとも思えない。学校では一応お嬢様キャラで通っているのだ。

と、考えていた私が甘かった。マナーモードにしていない携帯は早くも着信メロディを熱唱し始める。そう言えば最近携帯が鳴っている場面に立ち会つことがほとんどなかつたから、この歌を聴くのは久しぶりだ。というか連絡来るの早つ。

つつこんでいても仕方ないので、私は着信メールを見る。

本文：優希ちゃん暇なら一緒にゴトーハツカドー行かない？

差出人：平本春香

最近席が近くなつた同じクラスの平本さんからだつた。なんというタイミングで×mē×を見ているんだ。まあそれはいいとして、ハツカドーということは多分買い物だろう。まあそれはそれでいい

かな。

と思ったところで、またもメール着信。

と思ったところで、またまたもメール着信。

と思ったところで、またまたまたもメール着信。

気づけば新着メールが32件。嘘でしょ：私こんなに友達いたつけ。

クラスの垣根も学年の垣根も越えてメールが届いた。申請されたままにフレンド登録していたから、かなり私の発言は広まってしまった模様。名前知らない人からも連絡来てるし。どういふことよ。

「ひつ！」

今度はメールではなく、電話の着信メロディが鳴る。何に怯えているのか自分でもよく知らないけれど、何故か悲鳴が出てしまった。鳴り響く携帯を茫然と見つめる私。今度私と連絡を取ろうとしているのは誰？！ 誰なの？！

まるで腫れものに触れるかのように携帯へと手を伸ばす。誰からの連絡なのか、恐ろしくて携帯の画面が見られない。

「…うう！」

意を決して通話ボタンを押す。知らない人だつたら速攻で切るつ。そうしよう。

「もしもひ…」

噛んだ。

「あ、優希？ 噛み具合が凄く可愛いけどまあそれは置いといて、今暇なの？」

ああ、この声は…何回も聞いたことのある、慣れ親しんだ、この聞き飽きた声は…。

「…ひろみ…」

「…ひろみ…」

「…？ なんだかちょっと失礼なこと言われた気がするけどそれはまあいいとして。なんで蚊が叩かれて絶命するまでの最後の2秒間みたいな声出してるの？」

別に連絡がくれた人と私の仲が悪いとこうわけではないし、連絡をくれるつて本当はありがたいことだと思つただれど、あまりに唐突に大量の連絡が来すぎた。私は完璧に混乱していたのである。

「…ええと、その…」

一番の友達である宏美の声を聞いて多少落ち着きを取り戻した私だけれど、まだ冷静とまではいかない。うまく言葉が紡げず、宏美に説明できない。

「はあ…まあいいや。優希今暇なんでしょう？ ジャあ法度駅まで出てきてよ。一緒にお茶でもしましちよ。…今9時42分だから、10時30分くらいには来られる？」

「あ、うん…多分大丈夫。」

宏美はテキパキと私に指示を出す。いつも頼りになるといひはいつ見ても感心してしまつ。宏美が男だつたら私好きになつてたかも。浅井君の次くらい。」

「微妙にノロケられた気がするけれど、まあいいや。じゃあまた後で。寝癖は直ってきてねん」

「寝癖のことは言わないで…」

私が言い終わる前に、携帯からは通話が切れた虚しい音が響く。

私は恐る恐る自分の頭へと手を伸ばす。掌にふわっと髪の毛が触れる。

寝癖がつきやすい自分の髪質を呪つた、とある週末。

自転車を30分ほど漕いで、私は法度駅前の公園にたどり着いた。一応そこそこ大きな駅なのだけれど、所詮地方都市。あまり人は多くない。ちなみに自転車は宏美から借りているものだ。通学は浅井君が足になつてくれているけれど、さすがに予定が会わない日もあるから、やはり持っていたほうがいいということになった。以前持つていた自転車は今頃鉄屑になつてているだろう。

「あ、優希～！」

噴水の向こう側で宏美が手を振つてゐる。寒さのためか赤く染まつてゐる頬が可愛い。相変わらず足長いなあ。

「お、今日も素敵な寝癖。」

「ああ憎らしいこのイソギンチャク頭め～！」

「いや嘘だよ？！自分を信じて？！」

危うく自分の髪を引き抜きそうになつてゐる私を宏美が慌てて止める。宏美もまさか私がここまで自分の髪にコンプレックスがあるとは思つてなかつたようだ。

でも分かつてほしい。毎朝鏡の前で格闘する私の気持ちを分かつてほしい。

「は、私としたことが取り乱してしまった。」

「優希はいつでも常識の斜め上だね～。それじゃあ行こう。」

困つたような、見守るような優しい笑顔を見せる宏美。

そういえば、宏美の話をしておこうと思つ。

中村宏美。慎重165cm。体重は秘密。私の一番の友達。宏美と出会つたのは、高校入学直後。友達のほとんどいなかつた私に、真っ先に話しかけてくれた。

クラス分けが発表された時、私は友達の名前を見つけることがで

きなかつた。いや、探す名前がなかつた、というだけなのだけれど。地元の高校に進学した高校生なら普通友達の一人や二人一緒に高校に進学しているものなのだろうけれど、私は普通ではなかつた。私は友達と呼べる人間は一人もいなかつたのだ。中学校に通つていた私は、私であつて、私ではない。

私が作りだした、もう一人の「私」。

天然でもなれば、ドジっ子でもないし、非常識でもない、絵に描いたような優等生。

それがもう一人の私。先生にも誉められて、みんなからいい子と呼ばれて、いつも笑顔。そんな「私」。もう一人の「私」と友達になつた人は何人かいたけれど、それは私にとつては友達じやない。あくまで上辺の付き合い。それこそビジネスみたいなもの。本当に気を許せる相手は一人もいなかつた。

私は高校でも、もう一人の「私」に表に出てもらつていた。「変わつた子 神崎優希」は部屋に引きこもつていた。

そんな私に、宏美は声をかけてきた。

「ねえ優希ちゃん、あなたの笑顔、ムカつく。」

それが宏美の第一声。

放課後みんなが帰つた教室で、素敵な笑顔を添えて、プレゼントされた。

宏美はふらふらしてゐるようだけれど、実は意志の強い子だ。だから私が「私」を演じてゐることが本当に許せなかつたんだと思う。もう一人の「私」とではなく、私と友達になりたかったんだ。

私を見てくれた、初めての人間だつた。私を評価の対象として見る人間はいくらでもいたけれど、友達として見てくれる間は初めてだつた。

私は宏美とどんなふうに接すればいいかわからず、しばらくは喧嘩ばかりしていた。けれどいつの間にか普通に話せるようになつて、いつの間にか相談もするようになつて、いつの間にか友達になつて

いたように思う。大きなきつかけなどなく、本当にいつの間にか友達になっていた。

私が今まで「私」を演じていた理由も理解してくれて、みんなの前では私のことを優等生だと思っているようなふりもしてくれた（浅井君にも最初私が優等生だと紹介した）。浅井君と私が付き合っていることを伝えた時はさすがに驚いていたけれど、温かく見守ってくれている。

宏美がいなかつたら、私はいつまでも「私」だった。

なんてしみじみしているうちに、宏美と私は近くのカフェへと入る。

私と宏美はカフェの窓際の席で向かい合つて座つてゐる。コーヒーとサンドイッチを頼んで、女の子同士で語り合つて……なんておしゃれな一時。

「ダメじやない。優希は結構有名なんだから。」「いきなり怒られた。

「いや、別に私そんなのじやないし……」

「そう？ 鉄仮面の浅井啓司と付き合つて有名なのに。」

「鉄仮面？ 浅井君は仮面なんて被つてないけれど。

「あ、一応言つとくけれど本当に仮面被つてゐるってみんなが言つてゐわけじやないよ？」

先手を打たれた。ボケられないじゃん。

「浅井君、表情が貧困だからね。みんなおつかなびつくり話してるので。私も最初話しかける時は勇気が必要だったなあ。優希が普通に話してゐる見た時はびっくりだつたよ。」

宏美の話を聞きながら、浅井君との出会いを思い出す。

放課後の学校を放浪していた私が教室に入ろうとしたら、眼の前にいた。

最初は何の話をしたんだつたかな？

あの……君、女の子を驚かしといてそれを悠々と見下すなんて、なかなかのうつ氣だね……。

わざわざその姿勢を変えずにその発言をする君もなかなかのうつ氣だね。

大したこととは話していなかつた。

「まあ浅井君の話は置いといて、ちょっと優希、携帯貸して。」

私が返事をする前に、宏美はテーブルに置いていた私の携帯に手を伸ばす。

「ああもう、こんなにフレンド登録しちゃって…優希完璧にカモじやない。」

ログインしたままにしていた私の×mixを見て渋い顔をする宏美。私のほうを見もせずにカチカチと私の携帯を弄る。

「えい。」

妙に可愛い掛け声とともに、決定ボタンを押す。はー 今の録音しどけばよかつた。

はい、と宏美は私に携帯を返してきた。わけもわからないまま、私は携帯の画面を見る。

「およよつ? !」

妙な驚きの声が出てしまつたが、まあスルーして欲しい。

「フレンドの数半分になつてますけどお? !」

「フレンドじゃない人をフレンドから外しただけだよ? それとも優希は全員友達だったのかな?」

そう言われて少しムッとしたものの、改めて登録から外されたメンバーを確認してみる。

なるほど、誰かすらわからない。

「友達じゃありませんでした。」

私はすっかり小さくなつて宏美に謝る。宏美は完璧に呆れている。「もう…無防備って言うかなんというか…そのうち危ない宗教とかに嵌つちゃうよ?」

「すいません…」

危ない宗教。

その言葉のせいいかはわからないけれど、ふと先週見た革命家の人を思い出す。まあ革命と宗教は別物ではあるが。

世界は終わる。

終わるひどいひこうことよ。意味分かんないし。

そう自分で否定しながらも、妙な胸騒ぎがする。自分とは無縁だと思っていたのに、近くで何かが起こっているような気がする。

「危ない宗教つて、革命とか？」

私はなぜか宏美に聞いていた。自分の中の不安を誤魔化したかったのかも知れない。

「革命？」

しかしこの行動は逆に私の不安を搔き立てるだけだった。

「そういうえば、最近×mexで新しいコミニティできてたなあ。ほら、最近テレビとかでもやつてる革命家の。街頭演説とかも注目されるようになつて、何気にメンバー増えてるんだつて。聞いた話だけど、うちの学校にももうメンバーがいるんだつてさー。そのうちに本当に革命とか起こつちゃうかもよ？」

そう言われて、「コーヒーを口に当てたまま固まる私。

革命？ 本当に革命？ 」の国どうなるのよ？

「あ、そんなことより優希、ちゃんとみんなにメール返しちゃなよ？ 怪しい人はほつといてもいいけど、普通に友達からもメール来てたんでしょう？」

は、と我に帰る私。コーヒー熱つ。

確かにそうだ。私はゴトーハツカドーに行こうと最初は思つてたはず。平本さんごめんなさい。

それからしばらくの間、返信作業が行われました。

## 12月第4週（1）

今週末、私の両親は仕事の関係で家に帰つて来なかつた。

まあ別に何と言つことはない。

毎日毎日、私が起きる頃には既にいないし、私が寝てからしか帰つて来ない。だから家に帰つて来ないからと言つて、特に何が変わるわけでもないし、何か不便するわけでもない。キッチンに無造作に置かれている食器が使用済みになつていて、洗濯物が増えていることなどから、一応家には帰つて来ていることがわかる。

それを片づけるのは私の仕事。頼まれたわけではないけれど、なんだかこれをしなかつたら、両親の痕跡に全く触れなかつたら、私がこの家にいる意味はなくなつてしまつよつた、そんな気がする。

いつもなら私はノロノロと起き出してきて、先ず洗濯機を回す。自分の分と両親の分を一緒に洗濯機にぶち込む。思春期の女子高生の中には自分と父親の洗濯物と一緒にすることを嫌う傾向があるらしきけれど、私はそんなことはない。

むしろ嫌いになれることが羨ましい。何かを嫌いになるには、嫌う対象についてある程度の知識が必要だ。稀になんとなく嫌いなんて人もいるけれど、それだってとりあえず相手を視野に入れる必要がある。

私は自分の親のことをそんなに知らない。最近顔すら見ていない。それが普通になつていて自分が恐ろしい。

話を戻す。

洗濯機を回している間に、自分の朝御飯を作る。最近は体重が気になり始めたので野菜多めだ。絶対に抜いたりはしない。三食摂取は健康の基本です。週末除く。

食べ終わつたら、自分の分と両親の分の食器を洗う。いつから毎日こうしているのか、もうわからない。毎日やつてている

とそんなことどうでもよくなつてくるよつだ。そう言えれば今まで一度も洗わなかつたことがなかつたから、両親も毎日朝食を抜かずに食べているといふことか。

あ、数少ない私と両親の共通点を発見できました。

まあ朝の習慣（週末は午後までほつたらかすことあり）をだらだらと説明してみたけれど、残念ながら今日は実行しなかつた。いや、できなかつた。

今日私が目を覚ましたのは午前4時。

寝坊常習犯の私がこの時間に起きるなんて西から太陽が昇るくらいの一大事で滅多に起きることではないのだけれど、今日は起きちゃつた。テヘッ。

とまあ実際はそんな気分良く起きたわけではなく、容赦なく叩き起こされた。

午前4時まで戻ります。

「おい、起きる。」

野太い男の声で私の睡眠は終焉を迎える。

ぼんやりと男の顔を見る。と言つてもその顔はガスマスクと思しきものに覆われ、眼がぼんやりと見える程度だ。状況が掴めない私は部屋の壁掛け時計に目を遣る。

「…4時？ 私16時間寝てる？」

「午前4時だ。お前は真昼間に寝たのか？」

男は呆れた声で訂正する。

枕元の時計と違つて壁掛け時計は12時間表記なので、午前か午後かわからぬ。午前4時に来客があるとは思わなかつたので、とつさに午後4時かと考えてしまつた。

「寝起きで悪いがさつさと着替えてくれ。この家から少しの間離れていてもらつ。5分後にもう一度来るからそれまでに頼む。ああ多分、防寒着は必要ないぞ。」

男の表情は窺えないが、おそらく面倒そうな顔をして部屋から出て行つた。

私は状況が飲み込めず茫然と布団に座りこんでいる。

ガスマスク？ 顔しか覚えていないが、あれはいつたい何だつただろう？ どこかで聞いた声のような気もするけれど

「変態か？」

だとしたら寝巻のこの服では危ない。とりあえず動きやすい服に着替えるのが良いだろ？…と考えたが特に良い服装が思い付かなかつたので、なんとなく制服を着た。まあ動く分に大した支障ないし、とりあえずはこれで良いだろ。お金と携帯も確保して、すぐに外に逃げ出せる格好をして待ち構える。改めて時計を見ると、男の言つとおり午前4時。なかなか頭が働かない。

「おい、入るぞ。」

再び男の声がして、部屋のドアが開く。

「準備はできているようだな。寝癖は…まあいいだろ。」

男の指摘にズーンと落ち込むのはここではスルーしておいて、改めて男の服装を見てみる。ヘルメットに、薄汚れた耐火服、背中には謎のタンクを2つ背負い、そこからホースのようなものが伸びている。消火器を一つ背負っているかのようだ。一見すると消防士のような服装である。

「…火事ですか？」

間抜けなことに私は男に聞く。どうやつたって火事なわけがない。消防車の音も消防署のサイレンもないし、肝心の消防士がこんなに呑氣にしている。

「うん？…まあ火事だな…今から。」

男は微妙に言葉を濁す。そしてすぐに出るように促してきた。

「あ、ちょっと待つて…」

私は部屋を出る前に、机の上に置いてある箱を手に取った。

「行くぞ。あまり時間がない。」

男に誘導されるまま、私は家を出る。外に出てみるとやはり外は真っ暗だつた。火事など起こっていない。しかし、隣家にも、向いの家にも、消防士のような姿の人間が見える。

「もう中にはいない。」

「時間がかかつたな。こつちは避難が終わってるぞ。」

向いの家の男が私の家の男に声をかける。男はふん、軽く笑う。

「女の子を急かすのは良くないだろ。」

向いの男はそうだな、と軽く言葉を返す。

なんだかノリが軽い。今から何が起こるのか全くわからない。火事でこんなノリはおかしいし、かと言つておふざけでこの格好はやりすぎだ。

「無線連絡だ。準備完了。」

いつの間にか後ろにもう一人男がいた。同じように消防士のよう

な格好だが、すでに消火器のようなものを構えている。しかし、それは私が今まで見て来たどんな消火器にも似ていない。むしろ銃のような形だ。映画で見たことがあるような… 戦争映画とかで…

「 そうか。では始めるとしよう。」

男が手を擧げる。もう一人の男が、消火器のようなものの口を私の家へと向けた。

「 終末に良い夢を。」

銃が、文字通り火を噴いた。

この人たちは消防士でもなんでもない。むしろ逆の存在だった。もつと早く気付けたはずだった。止められたはずだった。止めることができなくとも、助けを求めるくらいはできたかもしれない。消防士が火事でもないのに。

耐火服を着て町中を歩きまわっているわけがない。

ガスマスクをつけているわけがない。

消火器を背負っているわけがない。

私の家に無断で入つて来るわけがない。

火炎放射器を、持つているわけがない。

「…あ…ああ！…！」

至る所から狂ったような声が聞こえる。

悲鳴かもしれないし、怒声かも知れない。だがそれは、燃え盛る炎の轟音によつてすぐかき消される。

昼間とは逆に、空の方が照らし出されているかのように辺りが明るくなる。相当数の家屋が燃えているに違いない。もしかしたらこの町自体が火の海なのかもしれない。隣の家も、向いの家も、その隣も、そのまた隣も、一齊に火のシャワーを浴びてその身を焦がしている。

防災訓練は結構真面目にやつてきたつもりだつたけれど、そんなものは全く意味がなかつた。事実私は、眼の前で盛大に燃える家をただ見ていることしかできないのだから。

「やめてください！ やめて…やめろ！」

私は何の考えもなく、男のうちの一人に掴みかかる。

「ああ、まだ避難してなかつたのか。自殺志願者か？」

男は振り向き、呆れたように言つ。

「この地区だと法度高校が避難場所だつたろう。死にたくないなら

さつさと行け。そのうち煙にまかれるぞ。学校で習わなかつたか。

男は私を振り払つて、再び火炎放射器の引き金に指をかける。

「やめろつて言つて……！」

私は再び男に掴みかかつた。火炎放射器の銃口を私の家から逸らすため、銃身を掴む。そんなことをしても無駄なのはわかつていて。既に炎は家を包み込み、その範囲を広げている。それでも、無駄であつたとしても、私はこの家に振りかかる炎を、不幸を、少しでも軽減したかつた。

しかし私は、先ほどまで火を噴いていた銃身の温度を甘く見ていた。いや、そもそもそんなことを考える余裕すらなかつたのかもしけない。

「ぐつ……痛つ……！」

掌に激痛が走る。熱いと感じる余裕もなく、私の肉が焼ける感覚だけが伝わつて来る。

「鬱陶しい。」

男は銃身を握る私の手を振り払い、私を突き飛ばした。意外なほど強かつた男の力に逆らえず、地面へと倒れ込む。熱源から離された掌は外気と触れ合いその痛みを鋭くする。

「わかるか？」

男は私に向き直つた。燃え盛る私の家をバツクに立つ男は、地獄の門番のようでもある。

「今まさに世界は間違つた方向に進んでいる。大切なものを引き継がす、余計なものばかり後世に伝えていく。さながら泥だらけの雪だるまだ。自分の生きる世界が間違つた方向に進んでいる時、自分はどうすればいい？　ただ見ているだけでいいのか？　私はそうは思わない。この世界で最も公平でないもの、それは発言力だ。『声の大きいもの』が発言力を持つ。『立派な民主主義だと思わないか？　だが世界がそう考えるのならば、私たちもそれで応えるしかない。何よりも強烈なメッセージを発信するしかない。』

「それが……」

「ああ、火は何より強烈だからな。」

燃える。燃える。燃える。あまりにも簡単に。

ああなるほど、こいつあの革命家だ。演説で何度も声を聞いたはずなのに、今までにつきりわからなかつた。

世界。間違い。公平。民主主義。発言力。メッセージ。

男の言葉が私の頭の中で渦巻く。

そうなのかもしない。男の言つことは正しいのかもしない。

この世界は問題だだけで、うまく行かなくて、足搔いている。

だけど。だけど。

「おい、ここはもういいだろ。移動しよう。」

もう一人の男が戻ってきた。人の家に火を点けているというのに、驚くほど事務的で、手際がいい。何の罪の意識もないよう見える。「ああそうだな。ちょっとこいつの処理をするから、先に行つてくれ。」

私を指して革命家の男は言う。処理とはまた、随分無機質な言い方をする。

もう一人の男はちらりと腕時計を見て、御苦労さん、とだけ言って去つて行つた。

「もう手遅れだな。」

男が腕時計を見ながら憐れむように言つ。

「早く避難しろと言つたはずだ。もうこれだけ火が回つてしまつた以上、人間の脚ではもうどうにもなるまい。お前はここでメッセージの一部になれ。」

はつとして周りを見回す。

目に映るのは、火。火。火。どこにも逃げ道はない。

「しかし、普通火事になつたら逃げるものだと思つていたのだが。お前は建造物と心中するつもりだったのか？ 物好きだな。」

建造物じゃねえよ。

家だよ。

私が今まで住んできた家で。

お父さんとお母さんと一緒に住んできた家で。

お父さんとお母さんが帰つて来る家だよ。

世界だつて大事かもしれないけど。

だけど、終わらせるだけじゃだめだ。

良いことも悪いことも、背負つていかなきやだめなんだよ。

「まあなんだ。焼け死ぬのも辛いだろ？ 一撃で楽にしてやる。田を瞑つていろ。」

男は火炎放射器から手を離す。今まで気付かなかつたが、男の太腿にはホルスターがあつて、しつかりと拳銃が収まっている。

「……」

あれ、私死ぬ？

私死ぬの？

男は拳銃を引き抜くと、上半分の部品をスライドさせた。ガチャリ、と音がする。如何にも準備完了という感じの音で、絶望的な音でもあつた。

「田を瞑らないのか…まあ、すぐに終わる。気を楽にしろ。」

カウンセリングのつもりか。妙な気遣いが本当に腹立たしい。

男は迷いなく銃口をこちらへ向ける。銃をこっちから見るのは最初で最後だろうなあ。

「お前の終末に良い夢を。」

それ決め台詞かよ。かつこいいな。

お父さんお母さん。

私死にます。最大の不孝つてやつだね。  
だけどさ、一人の家を守りうとしたんだから、そこは許してよ。  
なんて。

「めんなさい。

間抜けな絶叫と共に、誰かがこちらに突っ込んできた。しかもバ  
イクごと。

11

不意に突進を受けた男は盛大に吹き飛ぶ。映画でも見ているかのように、目の前がスローになつた。男の姿を目で追つていると、男は近くにブロック塀に激突した。

ががに激しく体を心地よくする。その場に倒れて動かない。死んでいてもおかしくない様子だが、恐らく死んでいない。そんな気がした。

目の前が通常再生に戻る。

突進した男の方もその衝撃で同じように吹き飛び、バイクと一緒に横たわっていた。

「痛つてえ！！」

「ああああ畜生！」

バイクの男は悪態を吐きながらふらふらと立ちあがる。すぐに私のほうを振り向くと、顎紐を外すのにかなり手間取つてから、シールドに鱗の入つたヘルメットを脱ぎ捨てた。

あ、それ高かつたつて言つてたのに。

「まだ死んでないな？！」

こんなに大声を張り上げる様子を見るのは初めてかもしれない。

彼の顔を見るだけで、私はなぜか涙が溢れて出て来た。

「…浅井君、このタイミングで来なかつたら殺しに行つてたよ。  
「殺されそつだつたやつが恐いこと言つてんなよ。」

ああ、浅井君。

相変わらずかっこいい。ムカつくなあ。

「ああ…もう…浅井君、最低…」

何が最低なのか自分でもよくわからない。  
でも、何故か涙が止まらなかつた。

「…あれ？ まあ…ああよしよし。」

そう言つて、私の頭を子どもにするかのように撫でる浅井君。  
そうされればされるほど、私は涙が止まらない。  
誰かに本気で心配してもらひつゝて。  
こんなに嬉しいことだつたんだ。

「おい、手怪我してるじゃないか！」

私の手を見て、思いつきり慌てる浅井君。そういえば怪我をして  
いたつけ。彼との再会ですっかり意識から外れてしまつていた。

「あ、うん。さつきこけちゃつた。」

下手な嘘にも程がある。

「火傷か…あまり酷くはないようだけど、下手に触れないな。」

冷静に傷の程度を見る彼。そういえば浅井君から手を握つてもら  
うのつて初めてじゃないか？ いつも私から握つていた気がする。  
実は今日はいい日かも。

「いや、じぶんことしてる場合じゃないし！」

ふと我に帰る私。じぶんじてる間も周囲は燃え続け、黒煙をもく  
もくと吐きだしている。氣絶している男が目を覚ますかもしれない  
し、もう一人の男が戻つて来るかもしれない。

「浅井君までここに来たらダメじゃない？ 馬鹿なの？ 死ぬの？」

「死なねえよ！ 落ち着け！ 僕はどうやってここに来た？…」

そう言いながら浅井君は横たわるバイクに駆け寄る。ああそつか。

突進のインパクトですっかり忘れていたけれど、バイクは移動に使うものだつたね。

「ああライトは割れてるしミラーは根元から折れてるし傷だらけだし…ああもう…」

ぶつぶつ言いながらバイクを引き起こし、状態を確認する浅井君。炎の真っただ中にいるというのに、興奮こそしているものの慌てた様子はない。

「よし、燃料は漏れてないな…！」

そう言つと同時に浅井君の手でバイクは息を吹き返した。そこで初めて気付いたのだが、バイクが今まで見たものより一回り大きく、排気音も図太い。

「これって…？」

「父さんのバイクだよ。とにかく急いでたからな…」

跨りながらそう言つ浅井君の声は妙に重い。

「多分…帰つたら殺される。」

今も十分死にそうな状況だと言つのに、呑気にそんなことを言つ浅井君。私はなんだかおかしくなつて、妙に落ち着いてきた。

「じゃあ浅井君の殺されるとこ見たいから急いで行こう！」

「急に活き活きしてんじゃねえよ！ 今シリアスな場面だから…」

そんなツッコミする浅井君も浅井君だよ。

そういう声は呑み込んで、私は浅井君の後ろに座る。

「行くぞ…！」

そう言つて、浅井君はアクセルを開く。

今日、私の住む法度市は、全焼した。

早朝に自分の家を失った私は、そのまま浅井家へと向かった。浅井君の強い勧めもあつたし、以前にも一度泊まつたことがあつたから私もそうしやすかつたのかもしれない。

「そう言えば浅井君、浅井君の免許つて普通一輪じやなかつたつけ？」

「…氣にするな。」

「ねえ浅井君、私たちノーヘル2人乗りだつたけどそれつていいのかな？」

「…氣にするな…！」

なんて言い合いながら朝つぱらから浅井家を訪問する。浅井君の反応がいちいち可愛い。

浅井家はバイク通学という状況が示す通り市の中心からは遠いので、今回の被害は受けていなかつた。久々に見る浅井家のはずだけれど、なぜか帰つて来たような氣もする。

「ご両親は？」

「まだ寝てるよ。」の家で休日の午前中に活動してるのは僕だけだ。

「なんというだらけつぶり。恐るべし浅井家。

「神崎は人のこと言えないだろ。」

「何故わかつた？！」

浅井君は絶対にエスパーだ。ケーシィといつあだ名は伊達じやないな…。

私は彼の部屋へと案内される。

部屋を入ると、まず驚かされた。以前来た時も片付いた部屋だつたが、今の彼の部屋は片付き過ぎていたのだ。本当にここで人が生

活しているのか不安になるレベル。ベッドも机もクローゼットも本棚も、モデルルームのような片付き具合である。それについて彼は何一つ疑問に思っていないようで、何事もなかつたかのようにクローゼットから「コートを取りだす。あれ、帰つて来たのに？」

あ、神埼、と彼は振り向く。

「申し訳ないけど僕はまた出かけるから。みんなしばらく起きてこないだろうから自由にしていいよ。ベッドで寝てもいいし。あ、火傷があまりヤバそうならすぐに病院に行け。うちの親に頼めば連れて行つてくれる。」

「え？ どこ行くの？」

「うん、まあ…ちょっとね…」

そう言つと彼はすぐに扉へと向かう。質問をする暇もない。ちょっと、という私の言葉を遮つて彼は扉を閉めてしまった。

彼の出て行つた扉を茫然と眺める私。

隠し事。

しないつて約束だつたのに。

ああもつ。

気にするのはやめよつー

「とう…！」

某変身するヒーローのように整えられたベッドに豪快に飛び込む。先ほどまで皺がなかつたシーツは私の形に盛大にへこんだ。なんだか破壊衝動が満たされた気がした。

「…」

私は浅井君の枕に顔を埋める。無臭の清潔な枕だ。

今日はなんだつたんだ。男に叩き起こされ、火事に遭つて、男に殺されかけて、浅井君に手を握られて、浅井君と帰つてきて…。

少し落ち着くと、手の火傷が痛みだす。一応この家に来てすぐに応急処置はしたが、まだ痛い。しかしどうしようもないのも事実だ。よし寝よう。

ベッドに横たわって、眼を瞑る。眼の前に真っ黒な世界……。

終末に良い夢を。

はつとして、すぐに目を開ける。全身に鳥肌が立っている。  
目を閉じても、そこに広がるのは暗闇ではない。

赤々と燃えあがる炎。それを背に立つ男。空が照りされ、黒煙が昇る。

「はあ……あ……」

恐くないはずがない。

浅井君の存在に支えられて、やつと堪えていたのだ。  
彼に頼つて、落ち着いたつもりになっていただけなのだ。

「う、うう……！」

彼が駆けつけてくれた時とは違つ感情が込み上げてくる。

恐い。恐い。恐い。恐い。恐い。

流れ出した涙は、なかなか止まつてはくれなかつた。

田覚めると、すっかり口が昇つてしまつている。

泣き疲れたのか、それとも浅井君のベッドに安心したのか、もしくは両方か、いつの間にか眠つてしまつていたようだ。汗ばんだ体が気持ち悪い。とりあえず体を起してベッドの上に胡坐を搔いて座る。多少行儀は悪いかもしけないが、誰も見ていないしまあいいだろい。

さて、今からどうすればいいだろうか。

家がないという状況は今まで経験したことがないし、何をすべきなのかよくわからない。

とりあえず今日の夜をどうぞうか。いや、それ以前に着替えはどうしよう。服とかも燃えてしまつただろうし、新しく買つしかないか。いやいや、その前に食事だろ。持ち合わせにも限界はあるし、買って食べてばかりでは健康にもよくない。

いやいやいや、そうだ。

まず、浅井家の人挨拶をしなきや。

浅井君の勧めがあったとは言え、家の人の知らないうちに家に入つてしまつた。それでいて浅井君はいない。もしかしたら、私が家の中に入ることさえ知られていないのかもしれない。それはさすがに失礼というか、不審者かと思つて通報されてしまつかもしれない。よし、まずは挨拶だ。

私は部屋の扉へと向かい、ドアノブに手をかける。まさか自分の息子の部屋から女の子が出てくるとは想像してもいなうだろ。多分驚かせてしまうだろ。うから多少心苦しい。

「はあ！」

別に波動拳を放つわけでもないのに妙に気合いが入つてしまつたが、無事に扉を開けられたので良しとしよ。次は、とりあえず2階にあるこの部屋から降りるしかあるまい。

部屋を出てすぐ右手にある階段へと視線を移し、忍び足で階段へと移動する。不審者がいると怪しまれても困る…あれ、考えてみればこの部屋は浅井君の部屋なわけで、足音がしても浅井君の足音ってことだ。

そこまで考えたところで、私の思考は停止した。

「…あ、えつと…」

「…優希ちゃん…」

階段を上がつて来た彼の母親と遭遇してしまったのである。

「お、おはようございます…」

これだけ間抜けな反応もないだろうと、猛省するとこだです。

それから一悶着あつて、いくつか。

まず、浅井啓司はこの家に一週間戻つていないこと。どうやら私はメールを送つてそれつきりらしい。彼の両親は多少心配していたものの、まだ搜索願を出すには至つていなかつた。どうやら彼、規則正しく生活している割に素行は良くはないようで、無断外泊なんてざらだつたとのこと。それが災いして今まで放置されていたといふことだつた。

「…まあ。」

しかし彼の父親は、落ち着いた様子だつた。

「あいつは頭がいい。きっと自分に何ができるかわかつてゐるはずだ。止める理由はない。事実、君を助けているみたいだしね。」

この人が世間的に良い父親なのは私にはわからない。けれど、浅井君のことをここまで信じてゐる人がいる。なんとなく、それが嬉しかつた。

「ただ、私のバイクを使ったことだけは絶対に許さない！！」

そして、この人は間違いなく浅井君の父親なんだと実感した。

次に、今日の事件。

革命団体「終末よりの使者」は午前4時、法度市の複数の家屋に放火。火は町全体に広がり、大規模な火災となつた。しかしどうやら私が寝ている間に雪が降つたらしく、消防隊の活躍もあつて今は鎮火したそうだ。幸い死者は出でないけれど、多くの市民が家を焼け出され、近くの学校や公民館に避難している。ただ、「終末よりの使者」はもともと死傷者がでないよう放火を行つたようで、避難誘導は完璧だつたらしい。となると雪も計算し、火が燃え広がらないタイミングを狙つたのか。人に迷惑かけるくせに、妙な気遣いがムカつく。

なぜ法度市のような地方都市を狙つたのかは明らかになつていなかが、この行動によつて国会は朝から大荒れ、各地で現政府への不満が爆発している。そういう意味ではあの革命家が言つていた「メッセージ」は人々の心に届いてしまつたようだ。あいつらの迷惑通りとは…さらにムカつく。

そして三つ目、私はしばらくなこの家にお邪魔することになつた。本当に浅井家の住人には感謝しなくてはならない。避難所は市民で溢れ返り、場所の奪い合いが起きているらしい。こういう時こそ助け合うべきだとか言つけれど、実際そんな余裕があるわけがない。みんな生きるだけで必死なのだ。

私の両親はどうやら今出張しているらしく、法度市にはいなかつたらしい。私が家で叩き起こされてから逃げてくるまで姿を見なかつたからまあそんなことだらうだとは思つていたけれど。ただ意外なことに、両親からは「いきているか」とメールがあつた。正直、こんなメールさえ来ないんじやないかと思つていた。それ以前に私のメールアドレスすら知らないんじやないかと思つていた。嬉しいなんてとても言えないけれど。

まだ、少しだけ。

私は神崎家の娘であるらしい。

とまあ色々あつて、朝の習慣は全く実行できなかつたけれど、私と神崎家との繋がりはまだあるのだと確認することができた。こんな事件がきっかけになるとは、あまりいい気分ではない。まあ、しょうがないと諦めよう。

そして今、私がいるのは浅井家の台所。

家を焼け出された私を受け入れてくれた寛大な浅井家の人のために、今日実行できなかつた皿洗いをここで実行しよう!といつ計画だ。うん、これぞ居候のあるべき姿。

と、そこまでは良かつたのだが、いざ皿を洗おうとして考えてしまつた。

「火傷つて…やっぱ洗剤とかまずいかな…」

包帯を巻かれた左手を見ながらぼんやりと考える。多少の怪我なら全く気にせず洗い物だの掃除だのしてしまつ私だけれど、火傷はどうなのだろう。私の人生で、火傷の経験は意外と少なかつた。

「ゆーきー…ちゃん!…」

「ひい!…」

思いつきりびっくりしてしまつたが、そこは許してほしい。いつの間にか私の背後に変態、否、女人人が立つていたのだから。

「ちょっと愛美さん!何で私のブラのホック外してるんですか!…」

「ああいやあ優希ちゃん、スタイルいいから思わずさあ。ごめんごめん。」

「それ全く理由になつてませんよね。」

私はホックを留めるべく背中に手を回す。この時期で厚着しているというのに一瞬でホックを外すとは…この人は重度の変態、否、手練れだな…。

「…隙あり…」

「うわっ！」

今度はガラ空きになつた胸に直接攻撃を加えてきた。背中に手をまわしていた私は反応が間に合わない。

もう驚掴み。アバちゃんこれ。

「さすが優希ちゃん、ブレザーの上からでも絶品だ…」

「褒められても全然嬉しくない…」

急いで愛美さんの手を振り払つと、下がつて距離を取る。急いでブラのホックを留める。

「はあ…油断も隙もありませんね。」

「もちろん、私を舐めてもらつちや困るわ。」

そう言つて胸を張る愛美さん。自分も立派に膨らんでるじゃないですか。

「もう…なんで彼氏でもない人に胸揉まれなくちやいけないんですか。」

「あら、彼氏になら揉まれてもいいのね？ 駄目も幸せものだ。」

「いや…別に…そんなんぢやないですから…」

「ははっ。優希ちゃん可愛いなあもつ。」

私の抗議もどこ吹く風、軽快に笑う愛美さん。この人と浅井君の血が繋がつてゐるのか。嘘でしょ。

「…なんですか？」

愛美さんは急に黙つて、私、私の左手、右所を見比べる。そしてもう一度私を見る。どうやら私がこれからじょうとしていることに思い至つたらしい。

「優希ちゃん、左手見せて。」

急に真顔になつて、愛美さんが私に言ひ。

「え、あ、はい…」

その気迫に押されて、私はあつさつと手を差し出す。愛美さんはその手を掴み、するすると包帯を解いて行く。自分で言ひの何だ

けれど、火傷の傷跡は痛々しい。

「ダメよ。」

「…はい？」

間抜けな声を出す私。何がダメなのかはもちろんわかっているけれど。

「これ結構痛いでしょ。よく洗い物なんてしようと思つたわね。」  
呆れた声で私は窘められる。

「え…まあ…あはははは…」

「笑つて誤魔化すなんてベタ過ぎてダメよ。」

割と傷つくダメだしをされた。ベタかあ…変人神崎なのに…。

「包帯また巻いてあげる。私の部屋において。」

愛美さんは私の手を引いて自分への部屋へと導く。特に逆らう理由もないでの、私は素直に着いて行つた。

「気持ちが変わる?」

愛美さんの部屋で包帯を巻かれながら、私は質問を繰り返す。

「そう、啓司と話しながら。さつきまで怒つてたはずなのに、とか、こんなのに関心なかつたはずなのに、とか、そういうこと思つたこ  
とない?」

愛美さんの部屋は浅井類の部屋と同じく片付いていた。さすがに生活感を感じないとこ「ほゞ」ではなく、「居心地の良さ」片付き具合である。

「いや…今までそんなことはなかつたんですけど…」

窓の外には雪が舞う。どうやら本格的に寒くなつてきたようだ。そういうえば「一トモ」も焼けてしまつただろうから、防寒着もない。

「そう、ならいいんだけど…はい、出来上がり。」

左手に綺麗に包帯が巻かれている。多少痛みもましになつた気がする。プラスチーポ効果というやつか。

「ありがとうございます…過去に、何かそういう話があつたんです  
か?」

愛美さんは暖房のリモコンに手を伸ばす。

「そうねえ…結構前、確か啓司が中学生の頃かしら。啓司が不良に絡まれたことがあつてね。啓司は完全に無視してて、もう不良たち怒つちゃつて。うちの前まで着いてきたのよ。それで私が様子見に家の前まで出て來たんだけど、そしたら急に啓司が不良たちの方向いてちょっと睨んだの。何余計なことしてんだ、ってその時は思つたんだけど、それで不良たち急に帰つちゃつたのよ。触らぬ神に祟りなしつて感じ。啓司の「こと避けるみたい」。やつをまで絡んでき  
てたのに、急にね。」

ピッヒとリモコンが音を発する。暖房が先ほどより勢い良く暖気を吐き出す。

「そう、あ、これも中学生の時かな。文化祭が何かの時、皆司何の間違いか実行委員になつて。まあ中学生なんて非協力的なもんよ。全然うまくいってなかつたみたい。けど、いつの日かは忘れたけど、みんな妙にやる気になつて。うちで作業もしたりして。なんだかんだ成功させたのよ。あの時はびっくりしたな。恐がらせるとか餌で釣るとかそんなんじやないんだもの。みんながちゃんとやる気になつてからね。超能力でも使つたのかしら。」

「超能力…」

私は愛美さんの言葉を繰り返す。

彼は鋭い。いや、鋭すぎる。

何を根拠に判断しているのかは分からぬけれど、彼には人の感情が手に取るようわかるらしい。嘘をついても、強がつても、隠し事をしても、作り笑いも、嘘泣きも、彼にとつては白々しい演技でしかない。人の気持ちがわかるというのは、どれだけ辛いことなのだろう。知りたくないことは、世の中にはいくらでもある。知らないことは、いくらでもある。

私は浅井君を苦しめていないだらうか？  
私と一緒にいて、浅井君は幸せなのだらうか。

「優希ちゃん？」

はつとして私は愛美さんを見る。

不思議そうな顔をして愛美さんをこちら見ていた。

「あ、いや、何でもないです、えへへへ…」

「笑い方変えてダメよ。」

ダメ出し。愛美さんは意外と厳しい。

「ま、そんなに気にすることじやないんだけどね。あいつがすごいのよ。きっと。」

そう言って、私に笑顔を向ける愛美さん。

本当、この家の人は浅井君のことを平氣で褒めるなあ…。身内のことつて謙遜するものだと思っていたけれど。

まあそれだけ浅井君は愛おれてこるとこいつことなんだろ？

…羨ましい。本当に。

## 12月第5週（1）～年末～

私の愛すべき田代まし時計は今頃雪に埋もれているだろ。いやそれ以前に黒こげか。

浅井家の居候生活も早一週間。服は愛美さんのものを借りることができたので不便することなく生活できているものの、そろそろ心苦しい。しかし家もなく、両親も出張先から帰つて来ないという現状において、私はこの家にお世話になるしかない。どれだけお世話になつていいんだ私は。

しかしそれ以上に気がかりなのは、浅井君のこと。  
結局先週から連絡は途絶えたままだ。

そろそろ捜索願を出しても良いのではないかと思うが、今出しても意味がないとも思う。  
だつて探してくれる人がいないから。

テレビの中の出来事だと思っていた。

だけど、そうじやなかつた。

一つの国が、終わるかもしれない。

正直今の私には状況が理解できない。今どうなつていて、これがらどうなつていくのか。私はどうなるのか。私の両親は、浅井君は、宏美は、田中君は…。

浅井君のベッドの上で、私は膝を抱えて丸くなつていて、2週間主を失つた枕は、もう私の匂いが染みついてしまつたことだろ。時間が、浅井君を消していく。

私の中で、浅井君の輪郭が滲む。

ねえ、浅井君。

そこにいな、浅井君に話しかける。

もう過ぎやつたけど、クリスマスプレゼントちゃんと準備して  
る？

時効なんて甘い考えは通用しないから。

私だつてちゃんと準備したんだよ。

ほら、欲しがつてた手袋。

あ、グローブつて言えつて言つてたつけ？

なんでそんなどろに細かいのか全然わかんないけれど、まあ許  
してあげる。  
だつてほら…。

息が漏れる。田の前が滲む。

浅井君、誕生日だから…ね。

ああ何やつてるんだろう私。

私は丸く畳んでいた体を伸ばして、仰向けになる。  
目尻から水滴が溢れ、顔を撫でていく。

寂しい。

静かだつた。聞こえるのは、自分が鼻をすする音と、息を吐く音  
だけ。

なんでだろ？、じつじてこんなに静かなんだろ？

浅井君の部屋をぐるりと見渡す。滲んだ世界に田を凝らす。  
辞書と教科書しかない本棚。何故か1体だけ置かれているロボットのプラモデル。車とバイクの雑誌が山積みになつている学習机。

… いっ ちに教科書置けよ。

H口本も、A▽も、グラビア雑誌も、同人誌もない。

… ない？

そうだ。この部屋には。

時計がない。

壁掛け時計も、卓上時計も、目覚まし時計もない。

あの手帳男は体内時計であれだけ正確な生活を送っているのか。

時計。それは束縛と責任の象徴。

それがない。

時計がない、という事実。それが何を意味しているのか。私は仰向けになつたままぼんやりと見える。時計がなかつたらどうなるだろ、と考える。実際は何の意味もないのかもしれないが、考える価値がある気はした。推理開始。

「わからんわ！…」

終了。

30秒程考えて、私は早々にこの問題を投げ出することにした。第一時計がないというヒントくらいで大きな進展があるわけがない。それに浅井君だって携帯を持っているのだから、それを見れば時間くらいわかる。

何か大発見をしたような気になつていたが、そうでもないような気がしてきた。これくらいのことではストーリーは進まない。事件の計画を書いたメモの切れ端がどこかに落ちるとか、都合の良い展開がなくては…。

私は体を捻つてうつぶせになり、枕に顔を埋める。止まりかけた

涙が、再び勢いを取り戻す。

あの男、ドジっ子要素が足りない。少しへりごとにヒント残しつけての。

「… ゆ、 ひ、 ちゃん…！」

「ひやあ…！」

何だか悲鳴が滑稽になつてきただが、まあ許してほしい。理由は言うまでもないだろうが、痴女が襲いかかつてきたからだと一応説明しておく。

「うん、 やつぱりお尻も最高だ！」

「その手つき常習犯か…！」

人生で最も俊敏に体を動かした瞬間だつた。瞬時に体を起して、痴女の方に向き直る。

「だから何やつてるですか…！」

「いや女の子もありかなつて…」

「もう笑いじとではすみませんね。」

痴女、否、愛美さんの言葉に私は真顔で答える。

「あら、 田が赤いわよ？」

「あ、 いや… これは…」

そう言つておどおどする私を見て、にやにやと笑みを浮かべる愛美さん。

しかし瞬時に真顔になつて、私に問いかけてきた。

「優希ちゃん、私たちが啓司をどうしてもつと必死になつて探さないのかな、と思つてない？」

「え、 いや…」

突然の質問で、私は返事に困つた。愛美さんは続けて言つ。

「実はね、私たちもこそつと探しているの。なんでこそつと探してるのでかと言えば、それは啓司に自分が探されてるつて思わせないめ。あの子、気を遣うといふ少しおかしいからね。もし啓司が、自分が探されていることに気が付いたら、きっとすぐに帰つてくると思

う。けど、またすぐに出でていくでしょうね。『また出かけるから』とか言って。だから、啓司が何をしようとしているのか見極めないといけない。いつもはすぐに何をしようとしているのかわかるんだけど。ちゃんとしたことしてるなら放っておくし、余計なことしてるようなら力づくで連れて帰つて来る。そんな感じ。』

そこで愛美さんは呆れたように溜息を吐く。

「だけど今回はかなり手が込んでるわね。正直そろそろ限界。次で何もわからなかつたら、もう心当たりはなくなるわ。DEAD ENDね。」

私は黙つて話を聞いていた。やっぱりこの人たちは浅井君のことを愛してるんだ。だから待つこともできるし、行動することもできる。

「ねえ、優希ちゃんは啓司のこと好き？」

「…ふえ？」

突然の質問に、よくわからない返事をしてしまつた。どれだけ動揺してるんだ私。

「どうなの？」

愛美さんが顔を近づけてくる。前から思つていたけれど、この人凄く美人だ。なんで変態なんだ。残念な美人なのか。いやむしろ変態のほうが重要なのか？

なんて考へてるのは照れ隠しで。

「好きです。好きすぎて生きるのが辛いです。」

変態だとか美人だとか考へながらこんなことを言つとは、私も充分残念だな。

「うん、そうかそうか。」

愛美さんは満足そうな顔をして、顔を遠ざける。美人が遠のく。

「それじゃあ、一緒に行く？ 手掛かり探し。」

愛美さんはキリッと笑顔を見せて、私に問いかける。私は即答する。

「行きます。連れて行つてください。」

「ふふ、そう言つてくれると思つてた。じゃあ早速行くわよ。ガレージまで降りてきて。」

そう言つて愛美さんはすぐに踵を返す。

そんな気楽に言つものだからてつきり私は車で行くんだろうと思つていたのだけれど、どうやら私は考えが甘かつたらしい。そもそもこの人が浅井君を圧倒する姉なんだということを忘れていた。

「……」

「どうしたの？ 早く乗つて。あ、そつか。はーヘルメット。」

「これ、ハーレーじゃないですか？」

ここまでハーレーが絵になる女性がいるとは、なんというか、日本人も捨てたもんじゃないな。まあ愛美さんが抜群にスタイルがいいというのもあるだろうけれど。

「はい、着いたわよ…」

「なんで残念そうなんですか？」

「だつて優希ちゃん思つたより抱きついてくれないんだもの…」

「聞いたのが間違いでした。」

それにして家族全員でバイク乗りだなんて、ドラマの世界の話だと思っていた。いつの間にか私はテレビに汚染されていたらしい。その家族の中のバイクは18から、というルールを浅井君が破つて大変だつたんだとか。全く彼は何にこだわっているんだか。

そんなことを考えながらバイクを降りた私の眼に映つたのは、大きな民家。道路には残らない程度の雪であつたが、家を凍えさせるのには充分だつたようだ。うつすらと積もつた雪が寂しげである。

「ここは…？」

「田中君の家よ。もうしばらく誰も帰つてきてないけど。」

その言葉にはつとしてもう一度家を見直す。これが田中君の家…。彼が姿を消してもう3カ月になる。浅井君の話によれば、今彼は世界のどこかで自分の存在と戦つている。

「できればここでは何も出てきてほしくないんだけど…一番何かありそうなよね…」

愛美さんは渋い顔をして玄関へと向かう。インターほんもない古い扉。主の帰りを待つていいのか、それとももう諦めてしまったのか、扉は無表情にこちらを見ているだけだ。

「えい。」

あつさり開けちゃつた。愛美さん、せめて鍵を調べるとか…。

「やつぱり鍵なんてかけないわよね。田中君だもの。」

「すんすんと家の中へと進んでいく愛美さん。私は少し後ろめたさを感じながらも続いて家の中へと入る。

「お邪魔します…」

答える人はいない。

しばらく使われていなければ、特に汚れている感じはない。家中を搜索していくが、不思議とどこも汚れていない。使われているわけでもない。誰かが掃除したかのような感じだ。モデルルームの感覚に近いか。

「何があるわね…ちょっと奥までいってみるわ。」

そう言って、愛美さんは私と別れて奥へと進んで行つた。ただ待つているわけにはいかない。残された私も、違う部屋を調べていく。どの部屋も、極端にものが少ない。必要最小限というか、最小限が揃っているかも不安な感じだった。

そんな部屋の中で、一つだけ。

他の部屋と違つて、扉が少しだけ開いていた。

「田中君の部屋…」

私は今までの後ろめたさをどこかへ押しやつて、部屋の中へと入つて行く。

田中君の部屋。浅井君の部屋とは対照的に、酷く散らかっている。この部屋だけは掃除の手が及んでいないようだつた。必要なものを選別して、持ち出していったのか。どの箪笥の引き出しの中身も、いくつか中身が抜き取られている。

「泥棒が入つたわけじゃなさそつ…田中君が旅立つ前に準備していつたんだろうな。」

ひとしきり部屋を眺め、今度は机に視線を移す。同じように教科書やプリントが散らかっている。私は手近なノートを拾つてパラパラとめくる。人のノートを借りない性質の私にとつて、自分以外のノートを見るのは妙に新鮮だつた。

「田中君意外と真面目にノートと取つてたんだ…ん?」

私の目はノートの欄外で止まる。そこに止ま、4つの島と3つの海。

「世界地図…」

良く見ると、何箇所かに点が打つてある。世界の都市だらうか。細かいところまではちょっとわからぬ。

「ここに行くつもりだったのかな…?」

思いを巡らせながら、ページをめくる。ページの隅、同じ場所にまた世界地図が書いてあった。良く見ると、点の数が一つ増えていく。

毎ページ、一つの世界地図と、いくつかの点。ページが進むにつれて、点は増えていき、世界地図が黒くなつていいく。なるほど。

田中君、授業中ずっと旅のこと考えてたのか。

彼が世界地図を書いている様子を想像してちょっと微笑ましくなつた。懐かしさで、胸がいっぱいになる。彼の快活な笑い声が、どこからか聞こえてくる。

田中君との出会いはなんだつたかな。

確か、宏美の相談がきつかけだった気がするけれど。キャンプの時はお世話になりっぱなし。

あ、私結局洗いしてない。

告白されたときはびっくりしたなあ。

ページをめくり、彼の思い出をめくつていいく。

ただ、私はわかっていた。

このページをめくつて、辿り着くところ。

「

言葉が出なかつた。

9月21日。

そこで、ノートは終わる。

彼は、私たちの高校生活から退場した。  
その事実が、私の目の前に立ちはだかる。

その時、何がきつかけかはわからないが、ノートの間から何かが  
すべり落ちた。

私はほぼ反射的に、しゃがんでその紙を拾つ。綺麗に折りたたま  
れた紙。どうやらノートを切り取つたものに書かれているようだ。  
私は書かれている文字を目で追つていく。

それと同時に、私の中を恐怖か、それに近いものが支配していく  
のがわかつた。

そしてそれは、9月21日に抱いた感情と同じもの。

その事実がまた、私の恐怖を増幅させていく。

神がいるかなんてよく分からないが、もじりのだとしたら、僕  
は神のことが嫌いだ。

浅井啓司の意外なほど達筆な字で、そう書かれていた。

田中、君がこの手紙を読んでいるところとは、どうやら無事に帰つてこれたみたいだな。まずはおかれり。きっと君はひとまわりかふたまわり、いやそれ以上、人間として大きくなつているんだろう。本当に、お前は立派だよ。

とまあ、良い話はここまでだ。短くてすまない。ここからはあまり愉快な話じゃないんだが、お前なら許してくれると思う。けど、最初に謝つておく。ごめん。

それじゃ本題。お前が世界を歩きまわつている間、ニュースは耳に入るのかな？ まあ帰つてきてるんだからわかると思うけど、この世界は多少変わつてるだろ。まあもしかしたらあんまり変わつてないかもしねいけれど、もし変わつてるんだつたら。

それは、僕のせいだ。

なんて急に言つてもわからないだろから、順を追つて説明するよ。

世界を変えるつてのはもちろん簡単なことじゃない。

まず、政治家の力を借りることにした。この国は民主主義の国だし。世界を変えようなんていうのに僕ひとりの力じゃどうしようもないしね。

じゃあ次に、どうやって政治家の力を借りたかってことだ。高校生ひとりが動いたところで政治家なんて動かない。なら、政治家を動かす力つてなんだと思う？ それは声だ。声が大きいやつが強い。必要なのは大きな声。だけど人間一人一人の声は小さい。僕の声も然り。けど、教室なんかを想像してほしい。うるさいだろ？ 声が大きいやつなんて一人か二人なのに、叫ばないと会話できない時もある。声つてのは足し算ができるんだ。人が増えれば増えるほど、一人の声が小さくとも、大きな声になる。

「大衆」の力を、借りたんだ。

ああ、ここからちょっと意味わからないかもしない。嘘だとも思つかもしれない。けど、これは事実だ。まあ信じてもらえないならしようがないけど、読むだけ読んでくれ。

僕は人の気持ちがわかる。何でそうなのかはわからないけど、なぜか、ね。お前が旅立つ前に、僕が妙なこと言つたことがあつたろ？ あれだよ。わかるんだ。

僕はあれを、ずっと僕が人の心を「受信」してるんだと思つてた。知らずに人の気持ちを拾つてるんだと思つてた。だからそつならぬよう耳を塞いでたんだ。あのヘッドホンはそういうこと。別におしゃれでやつてたわけじゃないぞ。

だけど、気付いた。僕は人の心を「受信」してたわけじゃなくて、人の心に「介入」してた。僕は自分でも知らないうちに、土足で人の心に踏み込んでたんだ。

何度もそう思うような出来事はあつたんだけどね。不良に絡まれた時「こいつら僕から興味なくなればいいのに」って思つてたら本当に興味なくなつてどつかに行つてしまつたり、文化祭の準備でやる気ないやつらのこと「やる気出せば楽しいのに」って思つてたら急にやる気だしたり、とかね。だけどそういうこと思つたつて特別なことじやないだろ？だからただの偶然なんだと思つてた。それに「しなればいいのに」って思つた時に必ずそつなるわけでもなかつたし。

でも最近、確信したよ。これは「介入」だった。

お前がこの国にいる時からだつたかどうかはわからないけど、街頭演説してる革命家がいる。そいつはいつも大衆に見向きもされなかつた。ただ一方的に喚いて、帰つて行くだけだ。だから何とか、「みんな少しくらい話聞けばいいのに」つて思つた。本当に思つただけだつた。それなのに、その場にいた全員… かはわからないけど、そう言つてもいいくらいの人が足を止めて話を聞き始めたんだ。正直ぞつとした。みんながみんな同じように話を聞いてるん

だ。そんなのいくらでも学校で見てたはずなのに、いざ外で見たら、驚くほど不気味だったよ。

なんで急にこんなことが出来たのかはよくわからない。けど、僕はそんなことどうでも良かつた。僕は「声」を得たんだ。誰にも負けない「声」だ。だつて「大衆の声」が「僕の声」なんだかい。

僕は今、幸せだ。神崎は僕の事を好きでいてくれて、中村は僕の友達で、両親は僕のことを大切にしてくれて、姉さんは、まあちょっと変だけど僕の面倒を見てくれる。

おかしいだろ。

神崎も、中村も、田中も、色々なことに苦じんでもるの。僕が幸せいでのいいわけないだろ。

おかしいんだ。この世界は。僕が幸せになれるこの世界はおかしいんだ。頑張ったやつが、苦労したやつが、頑張ったなりに、苦労したなりに、報われなきやおかしいだろ。

だから、僕は世界に変わつてもうひとつにした。

僕の声は、確実に聞こえてるみたいだ。

いつの間にかあの革命家は動き出したし、仲間も増えたらしい。実は世界規模の団体だつたとかなんていふ噂もあるよ。まあそれが本当だつと嘘だらうとそんなことはどうでもいい。そのうちわかることだしね。

この世界は変わると、僕は思つてゐる。確信してると叫つてもいい。なに、心配するひとはない。世界はちよつと週末に差し掛かってるだけだ。

また明日から、今週が始まる。

新しい世界で、新しい一週間が始まるんだ。

君がこれを読んでいる世界はきっと、今より多少マシな世界だらう。

次の世界は、田中が幸せになる番だ。  
僕は不幸のどん底まで落ちていくことにある。  
全く、こんな世界を作るのはね。

神がいるかなんてよく分からぬが、もしいるのだとしたら、僕  
は神のことが嫌いだ。

大っ嫌いだ。

どうすればいい？

私の思考は行先を失い、同じ場所をぐるぐると回るばかりである。浅井君の行動。それを知るべきではなかつたかもしない。でもそれを知らないままでいることも恐ろしいことだつた。

いやそんなことはどうでもいい。  
もう、知つてしまつたのだから。

「優希ちゃん、入るわよ。」

開けっぱなしの扉から、愛美さんが入つてきた。どうやら他の部屋を調べ終わつたようで、なかなか戻つて来ない私の様子を見に来たらしい。

「あれ、こりながら返事くらいい… それは？」

愛美さんは私の手に握られている紙を見て、動きを止めた。

「…ちよつとそれ見せて…！」

私の手から、紙を奪い取る。それを私は茫然と見つめる。

「私は…」

なんて見苦しい顔だらう。涙と鼻水で、ぐしゃぐしゃで。

「…どうすればいいんですか…」

私の頭は思考を放棄して、ただ言葉を漏らすだけ。

「…知るわけないでしょそんなこと。」

じぱらぐして、愛美さんは私に言い放つた。手紙を読み終わつたのだろう。ぐしゃぐしゃと紙を握りしめる音がする。

「…でも私がすべきことはわかるわよ。」

その一言に、私ははつとして愛美さんの顔を見る。決意に満ちた

逞しい顔だった。その顔に、浅井君の面影が重なる。

「優希ちゃん、質問。あなたは略司にどうなつてほしい?」

「…私は…」

突然の愛美さんの質問で、私は言葉に詰まる。

浅井君にどうなつてほしい?

浅井君に?

いや、違う。

私は。私は

「浅井君と、幸せになりたいです。」

「ははっ。」

私の答えを聞いて、愛美さんは少し笑つて、私の頭を撫でる。  
「はなまるの答えね。私すっかり優希ちゃんのファンだわ。」

「…え…いや…そんな…」

ぐしゃぐしゃの顔で精一杯謙遜してみたが、あまりにも不格好だ  
った。

今回の私はよく泣く。

「はいはい、無理しないの。ちょっと休みなさい。」

愛美さんは私の頭を撫でながら、子どもをあやすかのように優しく声をかける。

この姉弟はよく頭を撫でるなあ。

なんて考える余裕ができたのは、多分頭を撫でられたからだろう。

「それじゃあ、これからだけど。」

「だいぶ落ち着いてきた私の様子を見て、愛美さんは言ひ。

「多分、啓司は結構事を進めてるんでしょうね。先週法度市が放火されたのも、多分啓司の意志が革命家に介入したんでしょ。」

「多分そうだろう。私は頷いて同意する。浅井君は、私の家庭の不和を知っていた。だから、私の家が、まず許せなかつたんだろう。だから、法度市が対象になつた。

「そろそろ仕上げの段階なのかしら。あと啓司がしそうなことは...。」

「愛美さんは頭を抱える。あと浅井君がする」とつてなんだらう。

世界を変える。そう言い切つた男。

彼の望むこの世界の終末はどんなものなんだらう。

「なんなのよもう...」  
「そし...そしないで叫んでくれればいいのよ。」

「はあ、と愛美さんが大きなため息を吐く。

本当に、叫んでくれればいいのに。僕はこつしたいよつて、叫んでくれればいいのに。もつ、  
「こそしあやつて、わかるわけない  
でしょ。

「...叫ぶ？」

愛美さんは突然自分で言つた言葉を繰り返す。

「なんだろう？ 叫ぶ？ 優希ちゃん何か引っかかるない？」

「叫ぶ... 大声出すつてことですか？」

「大声... 声... 啓司、なんか声つて言葉使つてなかつた？」

「あ、使つてました。手紙ですよね。」

「声よね...」

「声ですね...」

「声... 声... 声...」

「ふうふつと、咳いてみる。

声…声…声…

まづい、声がゲシユタルト崩壊してきた。

「啓司にとつて声つてなに?」

「世界を動かす力です。」

「世界を動かすには?」

「大きな声が必要です。」

「大きな声を出すのは?」

「大衆です。」

「人が集まるのは?」

「ショッピングモールです。」

「そ

「こ

「だ

一人で同時に立ちあがつて、田中君の部屋を後にする。

「あ、でも、啓司まだこの町にいるのかしら。」

愛美さんは疑問を投げかけて来た。それでも、準備をする手を止める様子はない。

「いますよ。きっと。」

私は反射的に答えた。本当に反射だ。全然考えてない。けれど、私は口はその言葉にそれらしい理由を添えた。

「彼、寂しがり屋ですから。」

「ふふ、そうね。」

田中君、ちょっと待つててね。

あなたの友達を、この世界に連れ戻してくるから。

## 12月第5週(6)～終末

週末のショッピングモール。地方都市のこの町では、人が最も集まる場所と言つていい。街全体が真っ黒に焦げた今でも、吹き抜けになつている中心部は人で溢れている。

もちろん、買い物に来ているわけではないのだが。

よく集まつてくれた諸君。今日は君たちに決断してもらおうと思つて。簡単な二択問題だ。よく考えて選んでほしい。自らの行動の責任を負えるのは自分だけなのだ。誰かのせいにはできない。

「優希ちゃん、聞き入っちゃダメ。啓司の思つぼよ。」  
はつとして我に帰る。

「啓司を見つけてぶつ飛ばすしかないわね。一手に別れましょう。」  
そう言つて愛美さんは人ごみの中に消えていく。

そういえば、私が初めて革命家の話に聞き入ったのもここだったな。今までそういう話題は意識から外していると思っていたのに、何故かその日は最後まで話を聞いていた。

今ならわかる。

浅井君を見つけたその時、それが始まりだったんだ。

世界は終わる。何も学ばなかつた愚かな指導者、何も考えない群衆、双方の責任で世界は無様に続いてきた。

頭の中にやつの声が入つて来る。不愉快だつた。なのに、耳を塞ぐことができない。

浅井君、どこにいるの？ 誰かの声使うのなんてやめなよ。

誰かのために、誰かを使って、それで自分は不幸になりますなんて。

それで誰かが幸せになれるわけないじゃない。

「この世界は数多くの犠牲で成り立っている。自分の知らないどこかの誰かの犠牲で成り立っている。

人ごみをかき分けて、浅井君を探す。

不気味だった。これだけの人がいるのに、全員が一人の話を集中して聞いている。私が肩を押しのけても、ぶつかっても、誰も気にならぬ。

そして自分も、世界を成り立たせる犠牲の一つなのだ。だが今の世界は命を捧げる価値があるか。答えは否だ。

そろそろ演説が終わる。あの時最後まで聞いたおかげで、演説の内容を覚えてしまったようだ。こんな形で役に立つとは、素直に喜べない。

遙か昔から受け継いできたもの、それを後世へと伝えるのは我々の義務だ。我々は先に進まねばならない。今、この世界に終末を迎えるよう。

「はあ……はあ……ああ……」

人ごみをかき分ける作業も、もう限界だった。

近くの柱によりかかるて、周りを見渡す。どこにも、浅井君の姿はない。

浅井君、どこにいるの？ 声を挙げてよ……

今ここで、君たちの意志を問う。私と共に終末を迎えるか。否か。その選択は君たちの未来を決めることになるだろ？

「浅井君！　聞こえてる？！」

自分でも何をしているのかよくわからなかつた。

近くにあつたベンチの上に立つて、私は叫ぶ。声を張り上げる。

「聞こえてるよね？！　ここにいるんでしょ？！」

群衆の視線が泳ぐ。

間違いない。どこかに浅井君はいる。

「浅井君、責任感じてるんだよね。田中君から、私を奪つてしまつたこと。宏美から、田中君を奪つてしまつたこと。自分から、田中君を奪つてしまつたこと。それが許せないんだよね？　押しつぶされそうなんだよね？　だから、世界を変えたいんだよね。神様を見返したいんだよね。でも、それじゃ責任なんか取れない。いや、取るべき責任が間違つてる。自分が不幸になつたら誰かが幸せになると思つた？　なれるわけないじゃない。浅井君、いつたい自分がどれだけの人に愛されてるか知つてる？　幸せになつて欲しいつて思われてるかわかつてる？　田中君も、宏美も、あなたの両親も、愛美さんも、私だつて。わかつてるよね。じゃあ幸せになつてみせてよ！　それが責任取るつてことでしょ？！」

そう叫んでみても、声を挙げてみても。

返事などない。

「浅井君、あなたの部屋、時計がないよね。今やつと意味がわかつた。浅井君にはそんなもの必要ないんだね。責任を、自分のなかで背負いこんでるから。縛られる必要なんてないんだね。自分で自分を縛り付けてるから。だけじゃ、もう自分を自由にしてあげてよ。時計がいる世界に帰つてきてよ。私ずっと待つてるよ。私との約束覚えてる？　『お互に、ありのままで接しよう。誤魔化したり、隠したりするのはなしで』って、浅井君から言つてくれたんだよ？」

私嬉しかった。ちゃんと私と向き合ってくれる浅井君が大好きだつた。もうこの約束何回破られたかわからないうれど、それでも、許してあげるからさ。だから、私のこと幸せにしてくれるつて涙が頬を伝う。嗚咽が漏れ、息が苦しい。

「あの言葉は、あれだけは…嘘にしないでよ…」

その時、空間の、緊張の糸が切れた。

人ごみは喧騒へと戻り、週末のショッピングモールが帰つて來た。これが、本当に先ほど話を聞いていた大衆なのだろうか？ 不思議になるほど、あまりにも日常的だつた。いつの間にか革命家もないくなり、今ベンチに立つている私だけが、完璧に浮いている。

「あの…」

はつとして私は声の主を見る。

いつの間にか、眼の前にモップを持ったおばさんが立つていた。

「…はい？」

「そこ掃除するんですけど…もーうつていいですか？」

「え…」

そう言われて、慌てて辺りを見渡す。やばい、めっちゃ見られてる。

「す、すいません…！」

急いでベンチを降りて、頭を下げる。

涙ながらにベンチの上で声を張り上げる女子高生。完璧に不審者だ。

「優希ちゃん！」

愛美さんが駆け寄ってきた。かなり群衆のなかで揉み合つたらしく、引っかき傷が痛々しい。

「ああー良かった。無事だつたみたいね。この人たち大人しく話聞いてると思ったら急に動き出して…啓司のせいかしら。」

そういう愛美さんの肩越しに、こちらを見ている人影が見えた。行き交う人の姿が、まるでモザイクのようでもある。

「…浅井君？」

「え、どこに？」

私の言葉に愛美さんが振り返る。その時には、もうその人影はなかつた。

一瞬の出来事だったけれど、私はそれで満足だった。  
彼がまた、会う約束をしてくれた、そんな気がしたから。

週末なんて、大つ嫌いだ。

浅井君が、来ないから。

時刻は10時12分。

約束の時刻を過ぎてゐるということは、つまり、もう彼は来ないということだ。それでもまだこゝやつて待つてゐる私はかなり諦めの悪いほうらしい。

あれから一晩明けて。

年も明けて、何か変わったかと言えば、何も変わっていない。

ニュース速報でやつてゐたが、革命家の活動は頓挫したそうだ。最後の最後で、支持者が足りなかつたらしい。浅井君が何かをしてもしなくとも、結局彼らに世界を変える力はなかつたということか。今は放火の責任を押し付け合つて、醜く争つてゐる。

放火された法度市の復興は少しづつ進んでおり、その中でも私は特にすぐ再建された。両親の経済力が物を言つたらしい。さすがに大企業の幹部なだけはある。

ただ、驚いたことがもう一つ。

姉が、帰つて來たこと。

特に何を話したわけでもないけれど、私がいる家に帰つてくられた。それだけで驚きだつた。この家に私がいてもいいのだと、姉が認めてくれたんだとそう思つてゐる。

とまあ、色々あつて。

私は玄関先に座つて浅井君を待つてゐる。

浅井君が家に帰つてきたのは未明のこと。愛美さんからすぐに連

絡があり、浅井君の様子を知ることができた。疲労困憊の彼は一言、ありがとひと言つたそだ。そしてすぐに眠つてしまつたんだとか。

そこですぐにでも声が聞きたかつたけれど、そこはぐつと堪えて、今に至る。

あの時「そんな気がした」ことを、大切にしたかつたから。

浅井君との待ち合わせは基本的に午前10時だ。だから特に予定がなければ約束の段階での時間の指定は必要ない。

それなのに、もうこの時間。

浅井君は遅刻をしない。それだけ、責任に生きている男なのだ。要するに、もう彼は来ない。

まあそもそも約束をしていたわけでもない。約束をした気がしただけなのだ。

それに彼は疲労困憊のはず。少し休んだくらいでは動けないかもしない。

だから、彼を責めるのはおかしいし、待っているのもおかしいのだけれど…。

「あと5分だけ…」

なんてことを繰り返しているのである。

そういうえば、ここで残念なお知らせ。

浅井君への誕生日プレゼントを失くしてしまつた。これは全面的に私が悪い。あの騒動の中で、ずっとポケットに入れっぱなしにしていたのだ。あちらこちらに走りまわつているうちに、落としてしまつたらしい。結構奮発して買ったのに…無念。

ただクリスマスプレゼントだけは無事に守り切れた。けどまあ、来年に持ち越しになりそだ。今年は忘れてたつてことで見逃してもらうしかない。いや、待てよ。そもそもあの騒動は浅井君のせいではないか？ じゃあ私悪くないじゃん。

「あと5分…」

携帯で時間を確認しながら呟く。

もう来ないのはわかつていた。けれど、来ないといつゝことを認めたくないのだ。

彼との約束を、もう、破れたくない。

「もう5分…」

もう何回目かわからない。泣きたい気分だった。いやこれはもう泣いてるな。泣きすぎだろ私。

「 神崎。」

「 …優希？」

はつと/orして、私は顔を上げる。

目の前が滲んで、前が良く見えない。

泣きすぎだつて思うかもしないけれど、許してほしい。ずっと会いたかった人と、死にそうなくらい好きな人と、会えた時くらい泣いたつていいでしょ。

「…今何分だと思つてんのよ。」

「あ、いや、僕の時計ちょっと遅れてるみたいでさ…」

そう言つて私に腕時計をつけた手を伸ばしてくる。確かに10時を指している。

あれつ、時計…？

この「デザイン…」この妙に渋い「デザインは…」。

「これなによ？」

「ああー… もらつたんだよ…」

「誰に。」

「姉さん。」

…あの変態め。私に弟を奪われるのが嫌で嫌がらせしたな？  
私は思いつきり眉間に皺をよせて見せる。

「というかさ、なんで優希、晴れ着なの？」

私を上から下まで舐めるように見て、彼は言ひ。

このポンコツ野郎、ちょっと考えればわかるでしょ。決まってる  
でしょ。

「あなたと初詣だからちょっとと氣合いで入れたのよ… 悪い？…」

「いや、全然悪くない！ すつゞへいにです…！」

「もう、なんなのよ！」

「いやー」めんつて！

「もう、もう！ もう…！」

私は彼の胸を思いつきり叩く。硬い。この筋肉質め。

ひとしきり叩いた後、慌てて謝る彼の胸に私は顔を埋める。

「…優希…」

彼は私の頭を撫でてくれる。

「色々待たせちゃつて、『めんな。』

「許さない。」

「…ええ？」

「私を幸せにしたら、許してあげる。」

嘘だつた。

もしこの言葉が本当だつたら、私は浅井君のことをもう許して  
とになるんだもの。

「ああ、努力するよ。」

なんて彼は言つから、私は彼の体を強く抱きしめる。

「あ、なんかこれ、ちょっと…」

恥ずかしがつても離さない。離したくない。

「…優希？」

「…」

「あの… そろそろ行こうへ、な？」

「やだ。」

「…じゃあ、キスしてあげるから。」

「足りない。」

「…？！ えっと、じゃあまだやさしくねからー。」

「全然足りない。」

「これ以上言わせるのか？！」

「え、言つてくれるの？」

「…不覚…！」

なんて。

意地悪に返事してみたり。

クリスマスも、誕生日も、大晦日も、全然一緒に居られなかつた  
終末。

全部取り戻すべし、幸せにしてもらうことにじよ。

「ああもう時間なくなるじゃん！ 行くよー！」

「さつきまで行くの渋つてたのは優希じゃありませんでしたか？！」

私は彼の手をしっかりと握り、歩き出す。

週末に見る夢は。

結構、幸せな夢みたいですね。

## 1月第1週～週末～（後書き）

これでこのお話はおしまいです。

前作で書いたキャラの話が妙に膨らんだので書きました。  
キャラが独り歩きするとはこのことですかね。

最後まで読んで頂き、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9998q/>

---

とある高校生の週末

2011年3月9日00時40分発行